

## 世界に恥じない日本の幼稚園

小塩 節

過ぐる三月の末、私のつとめている幼稚園の卒園式に西ドイツからのお客さんがとび入りの来賓で出席しました。ボン大学の若い美人のドクターです。近くの小学校の校長先生も来てくださり、並んですわって幼稚園の校長先生も来てくださり、並んですわって幼稚園の子どもの門出を祝ってくれました。

式のあとでそのドイツのドクターが、心底驚いたと感想を述べたのは、第一に、百人もの卒園生が実に整然としていることであり（ヨーロッパの幼稚園や小学校には入学式も卒業式もありません。何となく始まり、何となく終わるのです）、第二には、式のおわりに子どもたちが式場からひとりひとり出ていくときに、親たちばかりか担任の先生たちが涙をこぼして泣

いている。これにはほんとうにびっくりした。なぜ日本人はこんなにうれしいうれしいうときに泣くのか。手を打つてよろこばばいいではないか——、そう言うのでした。この感想には私の方が驚きました。

第一の点について、幼稚園や小学校は一種の学園共同体であって、遊ぶときは徹底して遊ぶが、団体行動をするときには一瞬整然となるけじめが大切なのである。ただし、いまも東ヨーロッパ諸国のように幼稚園のときから軍事教練をするなどということは、日本では全くありえないと答えました。

第二の点、つまり親も先生も（実は園長も）このうれしいうれしいうときになぜ泣いたのか、ということですが、こ

れは幼児の成長への感動であり、別れの涙なのだ、幼き者の門出のはれやかさへのよろこびの涙だ。タバコを喫いながら保育をしているドイツの幼稚園の先生を私はたくさん見たが、日本の先生たちはもっと真剣なのだ――、そう説明してあげました。

外国人から見た日本の幼児教育は、もともとドイツ人のキュックリヒ先生などの影響が強くあつてそう異質ではないはずなのですが、根本的な文化や国民性のちがいはここにもはっきりあらわれてきて、お互いに驚くことが多くあります。この一点についてだけでも一冊の報告書ができるくらいです。

実は私は昨年まで三年間、幼稚園と大学の勤務を休職にしていただいて、駐西ドイツ大使館公使として赴任し、ケルンの日本文化会館館長をつとめてきました。職務上、ヨーロッパ人が日本をどう見ているかという情報がたくさん入ってきます。残念ながら誤解や偏見がとても多い。それを打破し、論破し、ほんとう

の日本の姿を伝えることが私の職務でした。

日本の幼児教育についてヨーロッパ人は、「大学受験の予備校であり、個性を殺す集団ロボット人間の製造」という考え方をしています。ここ数十年にわたって特派員や旅行者たちがそう伝えてきたのです。この偏見をぶち破るのはたいへんでした。

日本の大都會では出生率の低下とともに、園児獲得のために受験予備校的な売名幼稚園があることはたしかです。でも、さいわいにその数は減りつつあります。幼稚園で算数、英語、漢字を習った子が小学校に進み、精神的好奇心を失ってダメになっていく、あまりに当然の姿がわかってきたからです。全人格的発達が、集団の遊びの中で豊かにつちかわれていく。そういう日本のよき幼児教育の実相を私は懸命に伝えてきましたし、これからも世界の人びとに示してあげたいと思っています。

(東京都杉並・ひこばえ幼稚園)